俳諧之書

正九
三八二

へ 5
1426

門 1426 卷

天明壬寅

備前森々菴　松後述

俳諧伊賀者首之序

先師帰童仙ハ川く祖翁の信を伝らしく乃絶
四世の光あるを小四方の唫客遠よハを尋を労也
せしちなハ地を幸ひて学ふものハ牛毛
乃ちくなしを成ものハ麟角なるも反
しくなハ月く鹿しなるよ似く乃意日
夜よ喜ふこなたの玄妙ありく至わかる歌
なる所一日にを紙をはるる人も名利

よ眼くるみ言行のそいあしハ彼羊頭をけて
狗肉を賣る数いをを小愚贅を惑ふのをれ
よ吉備の国山彩る森く菴のあるハ幼乃時
庵師よ面えを父縁四老人の志を継く風雅の
信厚く先師乃門よ入まるを一日ふ学くいと
ハ次勉く倦をあるハ旭川の名わ小かを追て
あるハ糸貫ハ流ちを閑宮をとかをもまく
都乃交會ハ少くふかをはるく推敲の修力

をはくさるゝ事ハおよそ二十餘年なるへしかゝる
先師生前の常談にも我門に此人ありと継
諸に西國の探題なりとぞハ称せられしも宜なる
かな世の人々に異門の異風ハともあれ是に似され
非のものに害あるをを歎き邪路に陥るの輩
とかあらんと隨聞の要旨を記しをき慕ハ
しむ師の遺事ハ捨ひ録して今ハ廿ちしと思
き永く先師乃深意を傳へ人その徳のおもむきある

をも后の世にさとしめ給へとてかくまとくこの書
の深切なるをもて我さらにあらためしてかしや世上に
かゝまへたらんにもあらはしく千載の亡雲を偲ぶ
翅しと同志齋交の間ここに小序を辞せず出雲の
魚坊隣江菴の北窓小筆をとる于時天明
二年壬寅秋七月日

隣江菴

魚坊

遺事

先師ハ羕濃國本巣郡芝原郷北方の産なり
元禄庚申の七月より生れ給ひ氏を田中ゝ
おさゝ名を幸治郎と言ひ木のことなり言
市良ハとゝ雅號して東伯と八申せり
此名をもつて人も海内遠近の門
人の訪ふもの也五竹菴とのゝ尋ねてゆけ
ゞ犬ゐ童も合点せり是も徳の倫成へ

風雅の名ハ東蕉師のなつけ給ひしまゝ
初め五竹菴琴左ゑもんしゝ落髪の後ハ
五竹坊ゞ称し耳順ゑもんゝ歸童仙
ともゝ狂し給ふハ深き意のありけるゝ又
中ゝ五竹を五竹ゞ書給ひしハおもひを
はるゝ給へしゆへ雅と野鶏
ゞとゝ玄胡索を延胡索とゝるゝ数へる
数へし舊門四世の宗師ゝ八延享丁卯

の後ひて任ずおいて事をよそ三十餘年ホ
期に及びて秘記悉く今の勝菴に傳安永
九庚子の文月すゑ乃六日ホ没しぬ北方西運
寺中に葬るとや享年八十一歳
先師ひとくるの篤實恭敬ホに體容閑雅なり
一の又滑稽の趣ありて能く笑言し給へ人
はれ和一門人を愛し給ふと子乃如し頭冠
の法ハ醫を学ひて杏林の士を尤とし

人の生死に頼る事ホ如て術を施さ来
生質ちふ世事ホ意ホ多くあるに人の迷ふ
なる財寶声色の二つのみ都て彼ハ乃ち
欲ホかりくんを動し給ふ且暮の樂とて俳
諧ホに工夫ホ寝食をも忘れ給へれ
て和漢の書籍ホ多く一つ俳諧の爲に眼
とちに又禪味をもて悟して風雅の賢と
へなり給ふ扱て東藝師も北方

のふれることあり所あると常はに賞し給へるよし甚だいまさしと若くおもふまゝに彩
りて人をみな作人もやもすれば天下の奇才
あるをやもして東籬師乃波波庵に隨て
弟子の道を宗師と尊み給へる事
月羽の愈よ九めしあるを哉
とへ雜餐の喰ひ給へるかの數乃愈を捨て
この愈ひとつを給へる弟子に神も佛もなしや

いさゝかよりとかん法ふさんや名高き立竹の菴と
つゝ石をたゝく水を流しけるる石燈籠の風流
なるかきゝ甚居八北方に市中小せまりく表に行の
窓あるの師乃居間のして裏に第ふる軒容を
やとの舍あり庭乃松葉ハあるまゝもたくさの
外の調度もなるよ多かる維事に用ゆる
下章乃人乃續りくなるまゝあるしうと
たゝぬるかの弄ひ給へしかの閑明う

南湖の河うち及兼好かうしに如ものさきく
男し合ちくそくく行る
先師ものうしは豪放なりしを座師の規誡
ふるうくふかく酒禁しかあと三十餘年に
そうら持戒の僧徒に胡亡酢般若湯のかえ名
あふる斬くたくしを行ふこと由ことにそうれ志
かうもしるに積襲の結ひし行ふ爲り
そくに門人のあかちふすめしらを實や月義乃

席よ行くむくたをなるふ似うわ今ものを記よ
及ふ風に遠ふもあるねとて古帝の法ちこを
孟乃興を催さ行ふ又先師壮年より義柳中へ
いつ遊ひるのちてなし哥舞妓は今日の世情を知
ちよ便あらて人のいさるへはんを行ひ是を
そ日くの虚實よ行へかなるへ
先師性謙遜ふく風雅の德つを行ふ奴ら
行脚は捨別の行ちるふ我費積の悩ひあくを

かねあるものまいりまとへとて高き家富乃招よ
を越て路を師命ゝ為て三越行脚乃後を
あらちの紀伊勢尾張ひ〳〵へ後河乃を備ゝ
を限らを小〳〵路摩し路乃先師を〳〵世計の
為乃源海を事やし路乃人ゝへ毫中珠玉を湛
ぬ〳〵まゝるんさゝゝ小おつさ寸世乃俳諧師と〳〵
ゝつる者の集造るとて句料ひとゝつ又ゝ武
の乃ゝ丹青乃肉をいろとへ日を同〳〵して

を語る色ゝまちれや行脚へ〳〵路乃ゝも長徳を
慕ふ人流内ゝ満ゝあ
先師自の風雅小信あるへちゝゝ勧懲抑揚して
人を数ゝ倦をいちゝゝ路をうかゝふ者を先の新
ゝゝの意をいさなへ流すめる案をへらゝ〳〵
懲〳〵て其んをとを海〳〵をて住境ゝへ乃
親先ゝ到ゝゝゝ十句小一句を賞〳〵路乃を海〳〵
んゝかゝふ句あるはへちゝ黙〳〵ゝるわく笑路へ

のこ好ア一このそのうく笑ひ顔せを度くすん
さわしこそ遺憾るまを
師の人と教るその宗よ隨ふ一つるみうしに彼を
よハ自を安らうあやをの結ひ又是ふ立れも
聞へ一の東義ハもまかくやあわうん先師と齋
仙とハ筆硯とこそよせうら先師の句ハうれも
質なうさうハ取結ひる仙う句ハあまをも文る
をハ捨結ハうもしうら先師ハ文よ仙ハ質ふう

必へよ切る取をおさへく得ける前を揚うみる
色しちれや先師ハ句をて質をもうう
結へとも天性乃文たのつう俗わうよ面こと
ア文質掛こ自わうも言いけ色わし
の門人それ質と学むく文をうけうん
よを耶鄭の歩をうしなひて俗中の俗り
隨人をの名
師常ハ門人よ對しく翁のかくのうまひハ

いるる事しや東義師のかく書給ひしを
解しかねるやうと申されつる門人の疑問後
世をいかに信不信を揮わ給ひしかをして尋るの
信ある人よハ甚とる人水に流るゝを知くるわし
師曰俳諧ハ執行の信まあるべく自悟乃機を
俟り迷信なる人ハ千日が夜乃と説も
之詮なるべし少実や勝下まかるし人也
一生一句の境をたに知ぬ人も面目

いま壬辰の秋なる亀しを告さく門葉乃俳
諧今の如くなるハ蕉翁ハ徒言と成る附句往
なるわ中紀なんと師点ハ給ふ壁の年師やめう
少やて男松宇して訊せる門人乃俳諧すて
毋後子ハ言つるまうて欲しかるんや我もの
弊をさえぬと蕉翁ハ類向なるに附句ハらく
附るなわ脇の句ハ紀なく親しくなるそそ永さ
しらう實やさ後ハ間ハ髮ぬしもそ言人

附句もあまるゆえ
先師進退の謙遜はちらなら俳諧ふもの謙遜
ゆゑ老の到る工夫する事乃あるべはんの
はなを取をいはるのゝ口とく句ゆるゆゑ紀も
あるまされと老の工夫の届ぬもの自然なるは
老の僻ゝ媚をかゝるて句はなはつかんゝ
只やすゝのはらんゝは世の人徒言と笑ひへ
童部よりてんたの害なるんゝはと宣へ

帰童の号も此ゝ流ゆや自の名利を捨て道
重はゆゑらんゝて、ゝ世はゝ
ひ風雅と楽ゝ人ゝ
きもすゝめ風雅のゝ人ゝ名利はつれなむは
ゆゑゝありゝるするそちく七とも色て支
はは妹ゝ時はゝふく俳諧ゝ謙遜ゝ
今はひゝすゝの老衰ゝ句を附合もゝ
只吾子の執行をゝのゝ俳諧はまゝく

玄奘の場に至りて理窟の味ひ殆ども尽くし
おとる海まゆるに及ぶ〳〵八旬に及びても十論古今
折の如き暗誦なるに絶倫の識
決ハ〳〵明るかるやうひるすの謙遜のこゝろを
乃の為ハ六年の厳滅ともひ給ふ事あまき待
ヨリ異又あるかるき徳なるへ〳〵かるに影ひ古人
の中と雷ふ多くも聞へ侍らと
先師若年より及ひ給ひあまと鷲門五世乃統統く

面記人定らす門人なるも誰うしとゝあるくすめ
人をありとゆうえ〳〵ふ文の妹ヲ語て宣ハく道統
相承ハ乃の大事ありく中く容易ハ事ならと
上ハ三祖の遺令ふ宣ひ下ハあまる乃門人を惑
ゆを道乃興廃あるこの一事ありいとれ来書
かハゆるこのあるく欲呉越の恨をかるねるわ少も
正風の意通〳〵る人よと我と統をハ授く面れ
ゆゝ人口中ハ食とワ引るの親をあるる乃

乃害あるゝ者ゝ、いとく大事とハ任ずるを人
なるく八我ゝく統をやゝ〳〵わるゝ后乃君子あら
ハ又無るへ〳〵人乃なくなるゝ不ゝれと歌乃乃
ちくふあるゝもやと貫之の中の書けるを道ハ人
とゆくく興るの意なるへ〳〵さハその宗なる紀人ハ
統を伝るく世我国とハさん事ハ身命をかけく
すあるき物とと和哥ハ三神伝諾の三祖乃
誓てかゝくやきゝ給ひ〳〵給ふるの人を

ゆるまて八国ゝに風雅の冥富ゝもかゝひ
給ふなら面〳〵
風雅八人和のゝとゝるるゆゝ人ゝも俳諧ゝ是非あ
らそふゝひとのんふゝ事人くの中ゝ素
るるくなるゝふゝ事みくゝ給ひ〳〵れや常ゝ人乃
なるゝあゝとの多かあ〳〵八此故なゝ義をまゝかゝ
意おハゝ〳〵かゝ人の心八一般なる物ゝこと
先師あるゝ紀呼ゝく我自をなゝる八極めゝく物

まこと風雅のうへに工夫を積むこと四十餘年に及
び、おほくの誰人の問むるにも無下に口をへだてず
懇に宣ひしがあくまで謙遜におはしける人なれ
ば、仮にもかくやさしくいはるゝは胸中のあはれなり
こそかゝれ明眼の師をしたひ問残せる事の
多くして闇路をたどらん事ありこの悲さハ叔
のべてもせめてハ思ひあまりぬるなり

遺教

それ俳諧ハ當門の教乃外にあるへからず世に
何流何流とおのが称する者あまた俳諧といふ
趣すらず俳諧ハ天地開けし始即この道あり翁乃
俳諧せる道に於て何を翁を俳諧の聖として此の
道に至れる人なりけれやこの流を汲む者蕉門と
となふるもいまだ可ならず古今人の問むるにそ
正風乃俳諧をも言んものゝそれも外に對せるの
正すれハさ言ハすしもあるまじけれど天地自然

乃俳諧なれハ造化ハ自
己乃作意を富む色うすいさうを自己と
用ひられハ其ものハ物我ハ滑なく造化ハ己
みて己を造化なりとすハ力を色重
すく鬼神を感せしむへきやと先師常り
のたまへり
連哥と俳諧ハ虚實の立へある事師説乃
際を言ハく風月の情ハ實とそむくと連哥と
ハ俳諧ハ虚名の姿ハ虚を扱ふを俳諧とハいふなり
虚ハ居く實を行ハ居く虚を行ふ
強ふるとハ白馬経の第一義とうや
笠ハ出合ハ月ハ雨ハこの禁
磯山の梅ハ咲れ浪乃吉
是ハとハ濡くも姫ハ初れ
是等の句ハ連哥乃意なれ又俳諧ハ
うくひすの秋も出ぬやこの禁

いそ山れ梅とゆるぬ乃言

是れとハ濡るゝと海よ初ほ夏

かく虚實の表裏ゝ連俳のつらと都ゝや意ハ連

奇ゝ〳〵く言葉のゝ俳諧なるんハ所謂琴乃ルー

て田舞とるのそゝるゝ

發句ハ一句の内あるゝるん事を要ゝ微上

微下とゝて意を貴く〳〵なゝ言ゝ一句乃魂を

しらゝゝく句作ハ寛ゝ言ゝを除情あゝ〳〵附合

も一句聞〳〵くゝて言ゝく次の句を附〳〵や先

師の他ゝあれゝゝれゝ言る如き言語ゝゝ

又ゝ字ゝ語の字ゝさも彼魂ゝゝみかの寛ゝ

彼除情あゝしめゝ心ゝ為ふゝく需て他ゝゝゝ

あゝす門人ゝゝ意を学ゝとゝく句他のゝを真似ゝハ

徒ゝ駱駝の喩ゝるゝ〳〵先師ある耳在記ゝんゝく

為ゝ也ゝゝゝ意ふゝゝゝ仏ゝく津の國乃

なゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

と後の月を詠ずると幽齋のおよひ又空月
とてまことに真を捨てゝ和をハ知ず
俳諧の詞とてもさ言つゝそこくハ後れ月の詠なれ
ハ一ツ中ばかりまた蘇子瞻ら赤壁賦ゑ

人影在地仰見明月

ばかりいつゝを師匠ばかりハこゝ此句先に月をいひて
のち人影及ぶ所ハ理よりくして自然乃
姿をうしなひ句意無ていたるべしとかく

和ゑ漢ゑ古人を友とすべく百練千鍛の工夫あり
るゝ又賤の粉ひきうゝ船頭馬士の言ふ所にて
まくも俳諧ゑ今ゝあるをハなれ中ゝ
捨給ふべし
風雅ゑ理と理屈の数を先師ゆゑ理不理と
を未だ知ず理の境をとゝされハ一生俳諧ゑ
くゝこれ唯姿情の扱いをもとゝして情ゝ
入ればハ理屈ゝ入れハ理となる事

うの声は一歩千里なるべしやうなるものを
飛ぶ耳をもつく俗語を聞つる事をもく俗
語を見るべしと句作はひとつ連歌とする歌座
はよりたるあるわとて言くの艶なれはゆゑ
かくもありめべし俗語を俗談平話なるの中に
とくるときは風雅とうしなひ染情よりたれ
ハ情なつるとする歌座とまる句なれ〳〵殺句の
引句ハ要するふ及いなし

百姓とくるあるとくるふ
いそけと流しるのすりち
庶のうへハ白氏文集

又

鉢の実も常うあるい鉢のうち
沸うしてもかめる茶碗
養いうしとれたるうんそく

又

結袖を長くして姫も世第一の
御前進りとなりて
抱してちらす垣の小木
又
出産をまもる春宮の御
義墨栗のよハ仕めるく咲花
花市ハよ花めるく咲ひ
右をのく前章より後章より理れし
ちくしつ花まつの
附合より二句の味ひの事ハ翁と素庵師より到る
永しきひ八門柴の輩もやく其ほ
ちるよりしを花ともを三句目の變化なれ
八海分明なる所あり小ハ時機の到
らざれハ形ハ人今やその除元とかゝ
ハ三句目の變をかゝんと先師ハ
あり

[illegible]の写し相金筆
誓文[illegible]の内御日
一尺[illegible]御[illegible]
又
織[illegible]節句[illegible]
[illegible]
[illegible]書[illegible]奉加帳
又

赤坂と麻布のあいの一里塚と
組[illegible]
[illegible]
又
[illegible]
元服[illegible]
[illegible]
又

偽撰とゝ云ふ説かゝるものゝ
時を告いたゝく鳴いて
ちりぬるかぜのみなもと

又

柏ゆくゝ詩願兼敬
世ゝ編笠をかぶりて
牽頭の伴ゝとなりゝん
右の證句六句八句躰なる事を知るべし

俳諧の修行地に盡るべし是を思ふ
ものゝ早く不足に生るゝべし
佛と魔ふとゝ如く戒行ゝ我が句
疑を起さゝるに行ゝ難し能ゝ自ら
やゝ行ゝ句を知る門人より判ぜ
又多經を真に行ゝ句もあまた行ゝ
先師あるの夜語ゝ曰く八句に及ぶ浮世を
望ゝ知る事を不死の藥あり八今三十年

つくりつくる俳諧を執行せんとをこれ中
行ふ

みそ萩のまゝ白ふかう晴乃雪

こゝハ先師志立のころ其先考より引給
まの魂祭に唫みるの古帛ふあまりくもの白
絶てとゝ雨一滴ありて又風鈴丁

吉信ハこの物ゝあの者ゝ森
ゝ書くゝ書くゝ紙ひ一ゝ紙ひ多程てこの物ゝ

先師ゝ雨一滴ふ是ゝゝ先師の所ゝ少ゝ
かゝゝまゝ滴ふかゝの絶章ゝあゝねゝ一句ゝ
ちゝゝ滴ゝゝ風雅の信乃厚ゝ
又諸言微中なるゝ味ふ句丁
俳諧ハ姿の先ゝ情の後ゝ事十論の教なるの姿
中ゝ情ゝハ姿ゝ情中ゝ姿なゝ山やゝく

咲ゝ白ゝゝ人ゝそこに梅の色

ゝ先師ゝゝ唫丁滴ふ色ゝ尺ゝ紙ゝ欲ゝ引

て教示ありしに咲しなを其情の白くさん白く
なと其花乃姿みさ〳〵山海あるの情故生一情の
姿とあるを姿情ハ法れかる川くるんされや
先師ハ彼情中小姿ある白とあるを形ちの
未練の輩乃姿情よくてくして世乃俗語なる
情ハ知かるくを考後ハ事ハ事ハ事ハ事ハ欲恩
しるふあるを院ハくく

この結ハあるれゆるの号も晴

とハ情ハとかるくを破ふるを戒なるをハけふを
情ハ霧のとくんの月ハい川ハ隠ハくくまれ
くるをハるとあるめ方ハるるハ絵ハ迷ハの
写ハるくハ年の禁ハ還ハるくしおるて
をなるを恐るをハ情ハなるハの弊ハ隠ハ
風雅小変化の道理ある事途ハ輙ハるくく
上ハくくハ下ハ上ハと轉ハゆく也途輙ハなるハ
色ハくくハくくハ世ハくくハ絵の大きるハハく

なわ小さハやのく大きなるの誰かハ物め誰かわく
めし是をく天地自然の變化小く仮も自己を
めく需しへ〜まお真の變化を造化ゆ共ようるハ宗
師の任なり文道をハ貨を補い貨餘のあれハ文
を助き世の流弊をすくいく人法教るの義り来
代しをるり是まる風雅のうへのをなし心やこ
代の治も礼樂ハ同〜かをを此變化を仮く
人ハ柱ようるよをめ〜小いるへ〜すてに先師

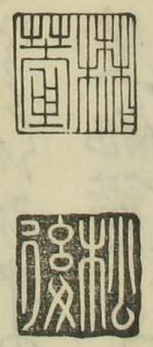
の一生すを今いよ變化るれ小もあるを門人
眼をいく〜めく看るへ〜
先師常ようる平生一般なわと教ひ〜う
めるを人難すくたハ實を遠く義をるるを
なるやと師こるく曰虚實ハ十論ようる散在ち
とハへるも一生説るる盡るるを今問るる所の實
ひるれを其實を虚めく虚といるを實なる
事虚實の虚実る變化をしハ虚ようる對てれ

實實に對しての虚なるしハ実なり
実なるまゝハ亦虚をなし虚實ハ
こゝ物の掬掛風雅のうへ乃嘯るしハ天地の
自然に至るくハ何ものか虚實の取捨あ
んやしと平生一般とハ言ふ所の古へより実
道とハ義なく花道しハ實なりと欲仙達も
其代くの掬掛あるゝ我ゝ俳諧りて
艶詞なく俗談平話ようのみくハ虚中

よ實あり實中亦虚ありてなるべき軌中の法
ともいふべき示ひし今ゝ俳諧の平生
ハ儒ゝ恒の心と教へ佛ゝ平生なと説ゝ
今日の拙ゝ俗情ゝあるゝ妙なしこゝ迷ハ
迷ゝすれもや彼十論ゝ雅俗のちゝを亮
ゝいふあるゝ亦ゝ示ゝしとや我家ゝ
筆をとゝ半俳諧ハ虚實のあつひと要
ゝく平生一般なるへゝしいな歟

奉とゝろかりる業をく師の遺事記さんを選く
德を書の後似られ業や例ふと百ゝ[illegible]と奉あ
まゝ隨やの說と到ゝも師の言ゝ[illegible]ん[illegible]
[illegible]ゝく多くかゝ[illegible]ぬ記性達筆の言ゝ[illegible]
とあさけりく[illegible]ゝい編集あんゝかりくゝの
形いるゝひそゝ[illegible]ふこの集ゝを[illegible]集とゝるの
鉤なりや

鮫翁松後謹誌



歌仙行　先師

山里や秋ゝ[illegible]の業　松後
秋の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]面　度江
る盟へ月光の約を新月せく　李川
奉公ゝをゝめゝるくなり　僧芦舟
深ゝまゝく逢ぬのもまゝ一ゝかりて　素光坊
ゝゝゝ都ゝゝる代や

眠ウ花と乳母ぶかさくら　雲行坊

不孝の罪を悔るかな　機因

産神乃恵なるらくのみたくく　巴卜

出用ふたのこ宮ひもなし　蔦山

淋くと志那てへ入江のうめうら　十明

千ゝ迄弥てを書るのよハ　其友

内認乃ひけを質ようるけを　逸川

男ゐるのたまを青雲　貞柯

祈禱も廻向もさく御経宗　此由

かゝる辺るの苣のたいこ　雅興

咲神花のるゝ枝のめつらく　孤松

帰洛の春をこゝろ古ひ　芦川

咲氣てを紫くくれるおい人　梅十

くるうるる空の癖ふ　其緑

ゝくくと車のきゝ如車ゐ　鬼拉

とゝきゝ歌をきつひのそね　八十吉

孫さえも白髮かゆく覺くらし　記六

一ぬかるなりしなるまま　子峩

雷害のちりをきりき麿郎う城　朝伍

大江の書ハ贊ものの世話　苒花

いさゝかゝんとゝ同志う告ゝ事　自撲

ナムアミダブツ　知泉

ちゝ登ち月ハきゝゝゝゝ　孤蘭

柳盜人を積みて至く　女梅君

初老ゝもゝしハ浮世の味ゝ　〃桃李

細ゝまを〳〵屋敷元乃借　〃菊波

貸傘のゝゝ拙ゝ出ゝ　〃巴香

辺ゝあゝまゝく佛事ゝ　〃佳紅

ゝゝハゝや今ハゝの義ゝ　水之

出閨ゝあゝふゝゝゝ　松宇

家ゝゝ山里の遺跡ゝ巻のゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ仏ゝゝ文の孫小ゝゝ師の病ゝ

きる外にはく賜り筆の跡かれハなからまとひりて信
てふれ行ハ行くも常なき風ふ常しく君の波あへさに
きまかゝれ病中人をはれぬもハ今のうちにこゝろへん
筆なとや記りはしなりん跡をくらへりしはわくハ
見んもせまうしみちやすしとらてハ今ふてかすひらて
なとさらすのたゝらさへきやうてくめてらくみつそこえ
ますんぬとこく我をうちに肉て記念とおもひ
しそ給ひしよれやそのこと筆をえんし出きあ
一帖よぬし大祥忌の祭をなすにひえかく
訪ぬ続く長く

涙乃きれと玄寒の奴

おもかけ残し筆有のはしれ

桃の嘗　櫻後

春

よく見れハ薺花さく垣ねかな　翁

君まちや衣さへの是ひめの色　李門

春も京ふ出てのあまくの姫鯉小　僧 芦舟

松の声ハ寒さに聞くに雪深し　子叙

ちらちらと鶯ハおりし梅ふ小　言緑

傘をさしてや門に飛胡蝶　貞柯

うくゐすの声ハいそふ山なる　女 巴吉

絲粒のいつれもして土佐の影　伴由

あさつ乳日し卸きくら鍋の花　鬼拉

人不知而不慍不亦君子乎

沙汰なしに咲く那梅の白ひかな　五筍

夏

それの年月の哀より海情の
先後を論ずるとて

耳ききく涼しさなして柳かな　定斎

とりくし世をくりて寿子れむ　孤松

咲けば色ありぬけば影の萩　女 紫浪

簾の外はなりけりや又月晴　芦川

夕立や飛出す蛙と池の魚　十朋

白露の朋をのすきや今の峯　白撲

いさひふし衣ひくもあはれさ哉　尼 知白

一聲や二つの月にほとゝぎす　淡路 羅浮

あかれゆく夜の中より蝉の声　同 京文蛉

行雨やまたゆくにも雲　同 京舟

秋

[illegible]　西吉場

[illegible]　元人　[illegible]四

[illegible]　紀六

あるもあり　女　俊石

月[illegible]　無色

[illegible]の国の[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　元人　[illegible]

[illegible]　伊波　機因

風さびしおやもとの[illegible]　無[illegible]

冬

[illegible]　[illegible]の上　[illegible]

風や未免ハ何[illegible]　梅丁

[illegible]人[illegible]の月　巴卜

扇ぬ[illegible]　女　梅[illegible]

[illegible]　桃李

[illegible]　[illegible]

一りをさまりて市の雪　鶴仙

[illegible]の雪ふりの山　遠川

冤角して誠[illegible]なる時　松浪

[illegible]の骨馬の跡哉　鳥惣

名所七句

赤石に宮[illegible]

[illegible]月の[illegible]の形う　春鶯

旅人の見やうもなく須磨の[illegible]　友山

牛関ふあるく関い[illegible]語海の[illegible]　孤葉

ほとゝぎす一[illegible]八[illegible]り　楊[illegible]　水[illegible]

[illegible]くしさや狭い所を[illegible]　六十八　八十吉

[illegible]句八あれの者[illegible]
[illegible]の巳門[illegible]

住の江や小貝[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]の関の小[illegible]　松浪

慶應義塾図書館

佐松宇

集然ぬ容あり〳〵標題の趣を問へかの今昔物語より效るなる温故知新よりなる歟亦〻〻童部らの戯語と擬するなる家君歟然〻〻と對曰何ぞ俳諧家にあり〳〵和漢洛中又ハ猿ゝ鳴ぬ古き小隨人や指を折て試りいまし先師よりなる

くの門人ゆあれと思ハ身ひとつのやうなりしめるふ世乃務のなりかくなる衆りに〻鴻〻なる今ハ〻〻や〻〻乃〻んや又先師の山里の一章ハ記念〻〻ひ〻筆の法なる人〻なる〻慕〻んや先師さ〻〻〻いまし三〻〻〻ふ道さふ〻遺女の俳諧ハ〻を記〻〻〻〻今ハ昔と歟〻〻んや古ハ我かゝ〻〻なくの

人ハ知ひとしてめて亦夢ゝ虫の好く
りよりハ今年ちゝと弄ひくせうう
くと代しを経るも此集ハ名ハ之
と丹波守侍史ゝ説をきくひらに
誌ゝ後乃序ニ代ル

京都書肆

七町通二條下ル許
橘屋治兵衛梓